

第八回 齋藤茂吉短歌文学賞

馬場あき子 『飛種』

短歌研究社

正賞・茂吉自筆色紙の織画  
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 小市巳世司

富小路禎子

中村 稔

前 登志夫

(五十音順)

## 馬場あき子『飛種』（自選十首）

秋深きつゆのひびきに思はずもどうと落ちたる磨崖仏頭

三陸の川を上れる太鮭のはららごを奪りて塩を握れり

心なし愛なし子なし人でなしといふこといへばさはやか

盲目の蟬丸の面手にとればまなこ薄らにひらきてゐたり

夜蟬一つじじつと鳴いて落ちゆきし奈落の深さわが庭にあり

時分の花といふものいつも咲いてゐるやうな新宿の夕べのあかり

夕ぐれの豆腐は籠にしづまりて深く愛さず怨むことなく

風光への感情の渦も遠くなりちからなし和歌の浦も死なんとしをり

色なき風身にしむといひし秋の朝の青幹の桐白幹の樺

秋風は過去の索引そのなかに萩咲けば萩は思ひ出づらむ



### 第8回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

馬場あき子（ばば あきこ）

歌人。歌誌「かりん」代表。

昭和3年1月28日東京生まれ。

昭和女子大学文学部卒。

昭和22年より窪田章一郎に師事。「まひる野」に作品を発表。昭和53年「かりん」創刊、今日に至る。現代歌人協会理事。朝日歌壇選者。

歌集に「早笛」「地下にともる灯」「桜花伝承」「葡萄唐草」「月華の節」「南島」「阿古父」等がある。

また評論に「式子内親王」「鬼の研究」「歌枕をたずねて」「現代短歌への架橋」「女歌の系譜」等があり、現在「馬場あき子全集」13巻を刊行中。

第20回遼空賞、第4回現代詩歌文学館賞、第45回読売文学賞、第38回毎日芸術賞。

### 受賞のことば

馬場あき子

若い頃から近代短歌の高峰として仰いできた齋藤茂吉の名を冠した賞をいただき、格別の感動を味わっております。戦争によって近代短歌を読み込む機会はいふん遅れましたが、戦後まず勉強したのは『万葉集』と近代短歌でした。茂吉の『赤光』や『あらたま』は歌に行きつまった時のひそかなハイブルで、早くからその下句の強さに教えられることが多かったのを告白します。

私がいま一番大切にしているテーマは自然と人間との対話のある世界ですが、この点でも茂吉の『暁紅』や『白き山』は読むたびに発見にみちています。現代短歌は言葉の問題一つを取り上げても、巧緻なアイデアがいっぱいですが、そうした面白さに加えて、人間の精神の問題がもっと追求されていいのだろうと思います。今日、茂吉はより広い多面的な読みが求められていると思いますが、私も、私らしい読みによって、今後も栄養を吸収しつづけたいと願っています。こんどの受賞を契機として、いっそう賞の名に恥じないよう歌に精進したいと思います。ありがとうございました。

## 選考委員の言葉

岡井 隆

『飛種』には、次のやうな歌があつて心を和ませます。

ひとつばたごといふ花けぶる目をも  
てり夢にみてるひとつばたごを

幸ひは住まぬと誰も知つてゐる山の  
あなたに行きて仕事す

表現は、いよいよ平明に、しかしその抱懐する精神には、凜然としたものがあります。馬場さんの歌は、熟成し切つてゐるやうに見えながら、どこか未来へ向つて伸びて行く勢ひが見えてゐるのです。不思議な作風といふべきでせう。

みつみつとひしめきやまぬアゼリア  
の春のいううつの眼は青みそむ

といふ歌は、ご一緒したBS短歌会の折りの即詠で、「みつみつと」などといふ古代語風の措辞に新鮮なものを感じたのを、

思ひ出したりしました。

心よりお祝ひを申し上げます。

## お祝のことば

小市 巳世司

馬場あき子さん、受賞おめでとう。

近頃は短歌の世界でも、すぐれた作品や評論等に贈られる賞がいろいろ設けられてをりますが、その中でも、この齋藤茂吉短歌文学賞は或る独特な風<sup>ほづ</sup>格、風格を具へてをるやうに思はれます。それはやはり齋藤茂吉といふ、特別に傑出した歌人の大変個性的、風土的な、しかも頗る人間的で親しみをも感じさせる風<sup>ほづ</sup>格、風格と相重るものがあるやうですが、そのやうな特別な賞を受けられたといふことは、ほんとに素晴らしい仕合せなことと、心からお祝ひ申し上げます。

## 自在な作品の重み

富小路 禎子

あとがきに三十首連載ということで一  
寸緊張したのが逆に軽いタッチになった  
一連から始つたと書いているが、全体に  
自在に詠まれながら、流れることなく心  
に残る作が多い。

唇にくれなるふむ仏頭は地に落ち  
てより笑ひそめたり

蟬丸は見ざりしか見えざりしかと問  
ふ人もなし知る人もなし

ひとりがいい一人がいいと白蓮<sup>はくれん</sup>は花  
二三百空に噴き上ぐ

作家の年輪からにじみ出てくる思索の一寸不思議な重みが、自然に美しい詩の味わいをもし出す。周囲の人も虫や木の命も共に温かく包み込む作品の世界に引き込まれ、心から受賞をお祝い申し上げます。

## 拮抗する天稟と教養

中村 稔

情念のふかき、あるいは情感の振幅のひろさといったものは天稟であつて、修練や努力をつんだからといって如何ともしたい。『飛種』を一読して私は、作者はまことに天稟に恵まれた人だ、と感じたのであつた。同時に、そうした情念、情感をつかみとり、的確に表現するには余程の修練、努力を必要とする。『飛種』にみられるものは、天稟に溺れることなく、作者のふかい教養にうらづけられた表現の見事さである。

庭石榴実りをすべて地に捨ててきび  
しき蟻を地に走らしむ

エーゲ海の入江に藻なく波音なしひ  
たしくる闇にわが身沈みつ

などの作に私はそうした結晶をみたのである。

## 明るい寂寥感

前 登志夫

「萎れといふ美を思ひあし初<sup>はつ</sup>老いの世阿弥の春のにがきさびしさ」という歌がある。歌集『飛種』には不思議な寂寥感があり、日常囁目のむしろ明るい事物の影のようにそれは存在する。

すずめ蜂や蜘蛛や胡<sup>と</sup>籬や大むらさきや  
トンボなどをうたい、さまざまな草花を平常心をもつて詠み、無心の境地に迫つているところに、歌という言葉の虚の空間の味わいがある。

唇にくれなるふむ仏頭は地に落ち  
てより笑ひそめたり

忘れても何さしつかへなきものの一  
つにて忘れず霜夜凍む音

隣室にまた殺人の叫び起きだまつて  
みてゐる男がひとり

種飛ばすもの何々ぞ吾庭には鶏頭深  
く怒りて立てり

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房  
第二回 本林 勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社  
第三回 塚本 邦雄 『黄金律』 花曜社  
第四回 前 登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店  
第五回 齋藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院  
第六回 近藤 芳美 『希求』 砂子屋書房  
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一七〇  
山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内  
TEL 〇二三六―三〇一―二三〇六